

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

福竜丸だより

— 都立・第五福竜丸展示館ニュース —

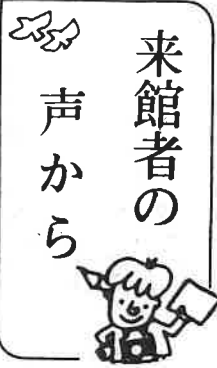


先生にまかせる! (115枚の連凧で、第14回新春凧上げ大会に優勝した江東区北砂小学校5年1組。1月15日、夢の島にて)

ビキニ島で原水爆実験をしてその近くで漁をしていた二人の乗組員が「死の灰」をかぶった。その時の船「第五福竜丸」はそのあとも使われ、おぼれてしまっただけで「ゆめの島」にすてられた。それを知った人々は、福竜丸に乗っていた人やその家族のいかり、悲しみ、苦しみなどを忘れてはいけないという事で、福竜丸を保存しようとする運動をおこした。たくさんの方が募金、署名などをした。その人たちは、ひしひしにやっただと思っ。福竜丸を動かすのだから、決して簡単なことではなかっただろう。でも、平和を願ってやっただ。だれかが原水爆禁止を訴えなければ、必ず平和はおとずれないと思っ。みんながヒロシマを忘れてはいけないように、このことも忘れてはいけないのだ。今の福竜丸には、たくさんの方々の願いがあるのだと思っました。京都府長岡京市日吉台小学校 六年五組 三宅川 登子

※この感想文は、六年生の現代史の授業で第五福竜丸保存運動をとりあげた、日吉小学校より送られてきたものの中の一編です。

来館者の声から



第五福竜丸を見て、わたしはびっくりしました。それは、わたしが思っていた以上に、ぼろぼろで、色がはげていたからです。

わたしは、見ていたら、第五福竜丸がともかわいそうだと思っました。水ばく実験をしていた所を通りかかって、あんなすがたになっってしまったからです。それに、乗組員の人も、とてもかわいそうでした。体についただけでも悪いのに、なめたりかんざりしたと聞いた時、乗組員のみなさんに、「なめたりかんざりしてはだめよ」といっあげたくなりました。

そのほかに、原ばくで、せなかをやけた人、手ははれてゆびが太くなっってしまった人、キノコの形のけむりの写真などがたくさんありました。わたしは、「ぜったい戦争はいやだ」と思っました。戦争のために死んだ人、第五福竜丸の乗組員のみなさんのようなことは、二度とくり返してはいけないと思っ

いました。今、第五福竜丸は、きれいにするために船を直しているけど、そのままの形でおいてあげばいいのにな、と思っました。

わたしは、本で第五福竜丸という船があっただけじゃあ、写真ののっけじゃあ、本物の第五福竜丸が見れて良かったな、と思っました(板橋区立蓮根小学校四年三組 長谷川 泉)。

ぼくは、あのこわれている第五福竜丸を見て、(ほんとうに治るのかなあ。なおったらいいな。)

もし治ったとしたらもう一度見にいきたいと思っています。でも第五福竜丸を見たときは、ポロポロだし白の色をぬってあるところはペロンペロンだし、でも治している人はすごいな。あそこわれている第五福竜丸を治そうとしてくれるんだもん。

ぼくは、(どうやって治すのかな。今つかえない第五福竜丸をどうやって治すんだろう)と、思っます。

りっぱな第五福竜丸にもどっねー(板橋区立蓮根小学校四年三組 片山素明)。



● いただきました
反公害輸出センターより「公害を逃すな」のバックナンバーを、吉村道興氏より原水爆禁止運動に関する書籍を寄贈していただきました。ありがとうございます(資料・書籍等整理される場合は是非展示館に寄贈下さい)。

是非御参加下さい

- 三・一ビキニ事件記念集会
とき 2月28日(金)
午後六時~八時半
ところ 国鉄労働会館ホール (東京駅)
挨拶 三宅泰雄さん
講演 松田解子さん (作家)
第五福竜丸被災のころ
映画 「生きていてよかった」
記録映画/亀井文夫監督作品
一九五六年封切り
朗読 武政博さん

編集後記

▼先日、映画「生きていてよかった」を見る機会があっ。亀井文夫監督のこの作品は第一原水爆禁止世界大会の被爆者救援カンパの一部によって作られた▼被爆後家から一歩も出ることがなかつた渡辺千恵子さんが、約十年ぶりに車で長崎市内を見物するシーンがある。爆心地の標識の前で、渡辺さんはそっと涙を拭う。その日が、渡辺さんの転機となっ。運動の高揚期に作られたこの作品は、「死ぬことは苦しい」「生きることも苦しい」「でも生きていてよかった」と見る者を励ます。封切りされた一九五六年は映画の最盛期でもあっ。記念集会では多くの人に読んでいただきたい▼次号で、高知の船員、武政博氏の詩集「海のない造船所」を紹介したい。

100万人参観者運動を!

86年1月来館者数	7,380名
通算1カ月平均来館者数	5,329名
当月1日平均来館者数	308名
通算来館者数	618,146名



「髪の毛が、手のひらの大きさがぐらひ抜けてしまった」という、ウトリックの被ばく者、ニーネ・プレチンさん(63才)もイソダ病院に入院している(1986年1月27日撮影)。

米国のコンバクト(自由連合協定)締結を見越して、新しいホテルや商店が次々と建設されているマジュロ市街のまん中に、波形のアルミ板で屋根も外壁も張られた米軍宿舎風の古びた建物がある。地元の人びとから通常は「ホスピタル」とだけ呼ばれているが、正式名は、アルマー・イソダ・メモ



写真・文 島田 興生

< 3 >

リアル病院である。初代院長だったアルマー・イソダ氏の名にちなんだマーシャル諸島に二カ所しかない政府運営の病院だ。六〇年代後半に建てられたこの病院は、現在では屋根や壁に穴があき、破れた窓には古板が打ちつけたまま、クーラー類はさびてボロボロ。マジュロにはあとほ小さ

な個人診療所が一つあるだけなので、市内はもとより離島からも病気がケガの患者が押しかけ、病院内はいつも人があふれている。平屋建ての病院の南側の一角に、男女それぞれ別になった二〇ベッド程の大病室があり、さらに幾つかの個室と二人部屋がある。私がイソダ病院を訪ねるのは、殆んどの場合、入院している被ばく者の見舞か、話しを聞くためなので、「通常」の入院患者の部屋を知らないでいた。被ばく者たちの病室は病院の北側にあって、男女合部屋(一応男女のベットは中央のナースステーションで区切られていた)で、二〇人分のベットが並んでいた。ロンゲラップやウトリックの被ばく者たちはいつもこの病室にいられていた。先日、通訳のウエルナーさんと病院で待合させた。すると彼は「そこはポリーヨウですよ」といった。「ポリーヨウって何ですか」と聞くと、「英語」のポリーヨウだという。よく分からないまま、当日その病室に行った。その「ポリーヨウ」には、ロンゲラップのティールバス・チェラン(五八歳)がいた。彼はすでに二年

三カ月この病院にいた。彼はライオン病で手足の先端を失ない、その治療のため入院していた。「ただ薬をのむだけ。足は少し良くなったが、毎日が退屈だね。」マーシャルの被ばく者の中、病院はアメリカのDOE(エネルギー省)の発行するIDカードを提示すれば、DOEの負担で無料、さらに一日二ドル(四百五十円)の手当がでる。しかし、ティールバスは昨年七月以来、このささやかな手当も届かず、「ノーペイ、ノーマネー」と嘆いていた。帰りぎわに、ウエルナーさんが、「ほら見てみなさい、皆んなポリーヨウでしよう」と病室内の車イスや松葉づえの他の患者たちを指さした。そうだった、マーシャル人はPをBと発音するので、「ポリオ」を「ポリーヨウ」と言い、手足の不自由な人を皆「ポリオ」と呼んでいるのだ。この病室にはいろんな身体障害の患者が集まっている。しかし、被ばく者が全部この病室に入れられるというのは、被ばく者の身体の内部疾患は、この病院ではチェックも治療もされず、表面に現われた疾患だけの治療に終わっていることを物語っていた。



ひょうしようじよう
あなたのためには展示館の屋根高く……
一月十五日 新春たこあげ大会明るく盛大に
「第五福竜丸とともにたこを揚げよう。あなたのたこは展示館の屋根高く舞いあがりました。よってここに表彰いたします」。たかさんの賞品と共に渡される小さな表彰状、どっと湧く拍手。一月十五日、夢の島公園でひらかれたたこあげ大会は終日、子どもたちの笑顔と歓声が満ちた。東京都の後援を得て協会が主催するこの大会は今年で十四回目。今年も地元の小学校を中心に千葉・埼玉からのファンも参加し総勢二百名。江戸風保存会の84歳になる太田会長も初参加し悠々と糸をあやつった。正午からのたこあげコンクール

は協会関係者が厳重に審査。焼津のまぐろや、船・鳩を型どったたこ、連風、三角四角六角立体・虎か猫かわからないたこ、格調高い江戸風……一斉にあがった百二十余のたこについて、デザイン、アイデア、あげっぷり、技術か熱意か、まぐろかほかなど論争。表彰式では百十五枚の連風を先生・父母・生徒一致協力、竜の踊るようにならせた。核兵器はいらない。平和な二一世紀をみんなであつくりあげよう、と一枚一枚書いた連風で奮闘した同六年生は特等賞を受けた。

船体工事もいよいよ三月完了へ

鋭く突きあがるようなへさき。船体修理はちようど一年。縦横に組まれていた足場も一部を除き取り払われ、たくましい船首の全容もよみがえった。甲板・船室の床天井・内張板も完全に取替られ、肋骨・船舷もがっちり補強されよきよきまでと思えてきかえ。いま最後の難所、船尾の内部骨格の取り込みで三月中旬、全工完了の予定。修理前のイメージ、色調は残すとの原則で新しい外板も区別がつかないように慎重に塗装され、当時の書体そのままに第五福竜丸の船名も復活。新しい生命が注がれたようにいま、ライトに映えている。

市民団体の見学会も

出版社・団体から贈呈された絵本・雑誌・平和カレンダーなど盛り沢山の参加賞を全員が手にし和気あいあい。本多喜美理事の船を大切にのあいさつのおと手をつないで船を見学した。
たこあげの熱気が残る展示館を一月十五日、草野信男・吉田嘉清両評議員、安井田鶴子さんはじめ

核実験禁止国際共同行動デーに「福竜丸と語ろう」

「いま第五福竜丸と語ろう」ことどもたちに核のない未来を」と一月二十六日、原水爆禁止日本国民会議・同都民会議・三多摩会議の主催により展示館前で、東京の集い、がもたれた。35年前の一月二十七日、アメリカがネバダで本格的に核実験を開始した日を、核実験禁止国際共同行動デーとし各地で行動をとのよびかけの一つとしてもたれたもので、二百名近い人々が参加。たこあげ大会もひらかれ、子どもづれの人々が即製のたこに核実験禁止、反核、平和などことばを書き、心持よい汗を流した。熱い甘酒もふるまわれ、ほほを上げさせて展示館を見学、死の灰に見入り、無言の船と語り合った。見学後は近くの会場で学習会。豊崎博光氏がネバダ・マーシャル・オーストラリアの核実験・被ばく者の状況をスライドを使って講演した。